

往復書簡 名乗りから始まるもの 異族たちの出会う広場はどこに？

小野俊彦
崔真碩

崔真碩様——一月八日付小野俊彦「腹の中の蠢き」を買ったこと、分かること、疑ったこと

これはお手紙なのですが、時候の挨拶の類は全略させていただきます。僕のような九州の運動界隈をごろつく山猫の骨と、テント芝居の役者で朝鮮文学の訳者である崔さんとの公開往復書簡なんて、いかにも珍妙な見せ物ですね。崔さんの出演した野戦之月海筆子『棄民サルブリ』の世界には、過去と現在、「あちら」と「こちら」などの、いろんな二項同士のネジれがありました。公開往復書簡などというものも、「私信」と「公信」のネジれであり、そのネジれを利用して崔さんとともに何かを考えられたらと思います。

さて、僕は大学院に在籍していたころ、朝鮮戦争にまつ

わる歴史、とりわけ第二次大戦前後から朝鮮戦争のころを朝鮮人の港湾労働者として北九州で生きた人びとのことを「研究対象」として選びました。北九州の門司という港町で、当時の記憶を探って在日朝鮮人のおじいさんやおばあさんを含め、いろんな人の聞き取りなどを試みました。しかし当時を知る港湾労働者を探すこと自体決して容易ではなく、結局数人の方から貴重なお話を聞いただけで、僕の聞き取り調査は諸事情により中断せざるを得なくなりました。……。(朝鮮)といえ、いま僕は崔さんの芝居を思い出します。崔さんはあの芝居の中で、自分の腹の中で蠢く〈朝鮮〉について語っていた。いや、それは〈朝鮮〉とは明言されていなかったかもしれないけれども……。ち

なみに僕は、腹を抱える崔さんを見て、レオス・カラツク監督の『汚れた血』という映画に出てくるアレックスが腹痛にもだえる姿を思い出しましたが、話が逸れるので止めておきましょう。崔さんの腹の中で蠢くものについて、日本人である僕は何を、何かを知り得るのでしょうか。僕はその腹の中の蠢きの意味が単に観劇者の主観に任されているものとは思えません。

僕は自分の生まれ育ちの中で〈朝鮮〉というものを意識したことはほとんどありません。朝鮮人に対する差別意識丸出しの父親の発言——はつきり覚えてはいないのですが、彼が高校時代によく朝鮮学校の学生らと喧嘩したという話の中で、彼は朝鮮学校の学生らの手口の「えげつなさ」を非難し、朝鮮人一般の道徳性を疑うような愚劣な発言だったように覚えていますが——に対して、「差別はよくない」という、どこかで教えられたような道徳面で注意したことを、なんだか苦々しく記憶しているぐらいです。僕は〈朝鮮〉にどう出会ったのか。いや、それは「出会い」と言えるようなものだったのか。まず僕は、研究の主題や本のテーマとして、いわば「売れている」主題としての〈朝鮮〉に出会ったとは思いません。そんな僕は、大学院生として研究テーマにある〈朝鮮〉という要素を利用・消費していただけなのではないかという気がします。大学や学術や教育の世界の中で朝鮮について何かを知るルートというのは、僕にとって何ら固有のものでは

なかったし、在日朝鮮人の友人と酒を飲んで〈朝鮮〉のことを喋ったって僕の腹が蠢くわけではない。大学で本を読んだ程度で、それまでの自分の〈朝鮮〉に対する、ということは日本の歴史と自らの位置に対する無知や無関心をごまかすことができるはずはないのです。僕にとって朝鮮というのは、「ウケて」きた、「売れて」きたひとつのテーマとしてあった。もつとも僕は、門司のひねくれ曲がった階段坂の上に静かに住むじいさんやばあさんたちの昔話を聞き取って、それをまともな研究論文に仕上げることも全くだきませんでした。聞き取りのテープを起こした原稿を、ただそのままダラダラ読み上げるような無能な学会発表をして聴衆を煙に巻いた記憶はありますが……。

崔さんが役者として芝居で演じたあの腹の中の蠢きを、僕は〈朝鮮〉という記号によって「理解」し、その芝居を「買いました。僕はあの日払った観劇料の幾分かをそこに分配すらしたのかもしれない。そのような記号を通じて、はじめて何かが僕に届き、ある記号を通じてはじめて記号の裏にある何かが僕に「通じる」ような気がする……と同時に、あの腹の中の蠢きが〈朝鮮〉だったならば、なぜ日本人である僕がそれを「分かる」などと言えるのか……そんな疑問が反響します。野戦之月海筆子という演劇は自らをどんな芝居として、あるいは、崔さんはどんな役者として、個々の、あるいはあのテント全体に充滿していた表現を客に「売ろう」としたのでしょいか。どう「ウケ

よう」としたのでしょうか。そういう、売ること、売れること、ウケること、そのような回路を通して、日本人である僕のような観劇者＝消費者が、〈朝鮮〉という記号に出会うとはどういうことなのでしょう。あれが、消費者ではない、「すでに分かっている左翼」に「通じる」だけの芝居なら糞喰らえです。もちろん、それが単に「値段分の満足」の話に過ぎないならばそれこそ下らないし、崔さんの〈朝鮮〉（だと僕が思ったもの）、あの腹の中の蠢きを「いい話」として消費するだけではないとは思わない。しかしやはり、僕が何かを「分かった」ということは、何かが「通じた」ということは、この資本主義社会の中では、まずもってそれが売れた、ウケたということとしてあるのも事実であり、同時にそこに「分かったふりをしていただけではないか」という問いも生じる……そこが出発点なのではないか。僕はどうも、崔さんとお会いしたとき、崔さんが言っていた「役者と訳者」にも関わる、乱暴な問いをぶつけようとしていますね。

先日お会いした在日朝鮮人の若い女性が、「私はまだ朝鮮半島には行けない。言葉の問題もあるけれどそれ以上に、消費しには行きたくないから」と言っていました。僕は自分が韓国に行ったときのことを思い出しました。一度目はワールドカップ日韓共催の時（二〇〇二年）でした。二度目は何といますか、いわゆる運動界隈のツテでいろいろなところを廻って、イ・ミョンバク退陣を訴えるデモな

どにも呑気に参加しました。前者の場合は言うまでもないでしょうが、後者だって、自分が韓国を消費しなかったわけではありません。開き直るつもりではないのですが、「消費しない」とはどういうことなのでしょう。僕はむしろ、「本当に消費する」ことが必要な気もする。僕達が言い習わしているいわゆる「消費社会」の真っ只中で、人間関係が徹底的に貨幣に媒介されてあるなかにも、やはり、殺し、食い、自分を再生する、そんな光景があるのではないでしょうか。それを見ることから何かを始めなければ、「資本主義を超える」などというお題目を唱えているだけに終わってしまうのではないか……。

僕は日本とは差別と侵略の別名だと思っています。そこで日本人として生きる僕は差別と侵略の「血債」を何らかのかたちで負っていると思います。しかし、差別者と被差別者、侵略したものと侵略されたものとを善悪の二分法に還元するのは簡単だけでも、僕たちが生きている場所では、何気ない顔をした善と悪とがもつと相互に没入しあっているのも事実だと思います。昨今街頭で大きな顔を始めたあの愚劣な日本人のモツブどもだけを「悪者」にして、その一方で何食わぬ顔をして街を跋扈しているそれ以外にも、そのような場所を見つめることは重要なのではないかと思っています。この資本制と国家が支配する社会にお

いて、そのような善と悪とが未分明に、相互没入のようかたちで「通じてしまっている」瞬間や場所を見ること……最終的な「革命」などを待つのではなく、すぐそこに

あるそのような光景を見ることこそが、本当に人間を変えてゆくきっかけなのではないでしょうか……。僕が最近、愚図愚図と考えているのはそんなことです。

小野俊彦様——二月一日付崔真碩 お腹の中で朝鮮が蠢いている

こんにちは。アンニョンハセヨ。ちえじんそくです。よろしくお願ひします。

梅の花が咲きはじめました。寒い冬が終わりかけ、春の

足音が聞こえます。毎年のことながら、今のこの時期には、新しい季節の訪れとともに、ささやかな希望を感じます。新鮮な気持ちです。

ほんとうは、小野さんとお酒でも飲みながらゆっくりと談話したいのですが、それは別の機会に譲るとして、この往復書簡を通じてテント芝居談話、フリーター運動談話に花を咲かせたいと思います。

まず、小野さんの言葉に応答しつつ、朝鮮と日本、朝鮮人と日本人という在り方の話から始めたいと思います。

私は、長らく、朝鮮というものを抑圧してきたし、恐くずと避けて通ってきました。知らず知らずのうちに、そうなっていました。「僕は自分の生まれ育ちの中で〈朝

鮮〉というものを意識したことはほとんどありません」と言う小野さんと、表面的には変わらない少年だったと思います。

私は韓国籍で本名を名乗っているのですが、また役者として朝鮮を表現しているので、当然のように朝鮮と向き合ってきたと思われるかもしれませんが、朝鮮人だからこそ、朝鮮を避けてきました。私が朝鮮と出遭い直し、自分のことを朝鮮人と名乗るまでには、幾度もの自己の解体の過程を経てきました。

正確に覚えていますが、私が朝鮮人と名乗るようになったのは、二〇〇二年九月一七日以降です。それまで、ソウルで生まれ、東京で育ち、自分のことを韓国人と名乗ることとはできて、朝鮮人と名乗ることはできませんでした。それは、なぜ?——その問いは、表現者としての私の動機の根源にあるものです。

官民一体となった北朝鮮バッシングが横行する日本社会

のなかで、私（の身体）は、ウシロカラササレル、日本社会の空気をそう読みました。怯えと冷静とともに。いま跋扈している「在日特権を許さない市民の会」と同じくらいに、在日朝鮮人についての知が無い日本社会で、北朝鮮バッシングの矛先が向けられている朝鮮総連や民族学校への嫌がらせは度を知らず過激ですが、とりわけ拉致問題一色に染まった時期や、北朝鮮の核実験が行われた直後には、「朝鮮人なら誰でもいい」というような狂気・殺気を感じました。きつと、韓国籍と朝鮮籍を問わず朝鮮人である者はみな、また日本に帰化した見えない朝鮮人も、日本社会に蔓延している暴力を同じように察知し、身構えた／ているのではないのでしょうか。

この空気は一体何だ？ 空気として漂っているこの暴力は？——そう困惑すると同時に、私（の身体）は、関東大震災時の朝鮮人虐殺を直感的に想起しました。この社会には依然として、ウシロカラササレル、背後が気になって仕方がないような身体の緊張があるし、虐殺の暴力が空気として漂っていると。私が朝鮮と出遭い直した瞬間でした。

この時から、私は自分の名乗りを、韓国人でもなく、在日でもなく、朝鮮人と変えました。私は、韓国人だからでもなく、在日だからでもなく、朝鮮人だから、ウシロカラササレル。暴力に身構える身体の緊張を通じてそのことを知ったのです。私のこの名乗りには、日本社会の状況を許さないという理性と怒りがあります。おそらく、きつと、

私は名乗りを変えたこの時、お腹に何かを孕んだのでしょうか。それが腹の中で蠢いている。

昨秋、野戦^{ヤセ}之月^{ツキ}海筆子^{ハイペイシ}の公演『棄民サルブリ』（東京・井の頭公園特設テント、二〇〇九年一月）で、私が演じた残恨^{ザンガン}は、直截には出てきませんでしたが、関東大震災時の朝鮮人虐殺を表現しました。作／演出の桜井大造の言葉で言えば、関東大震災時の朝鮮人虐殺を「再発明」しました。関東大震災時の朝鮮人虐殺が今ここに在るものとして。それは眼には見えないけれども消えたわけではけつしてなくて、身体化され、お腹の中で蠢いている。

劇中に、

サルブリ 残恨の半分は、死んだ人なの？

残恨 うん。いや、違うか。動いているんだから死人じゃなくて、胎児かもしれないな。

という台詞があります。これはとても難しい台詞でした。しかし、ほんとうにその通りだ、希望とともにそう感じる、ぜひとも言いたい台詞でした。

残恨がお腹に孕み、お腹の中で蠢いている死者は、動いているんだから死人ではなくて、過去にはなく現在に、そして未来に控えている他者なのではないか。残恨が孕んでいる死者は、未生の他者として、胎児ととても似ている。

これはあくまでも芝居的想像力による表現なのですが、しかし、この想像は、過去と現在の歴史とともに在る私たちの生と結び付けて捉える時、とてもリアルに感じられる隠喩なのではないでしょうか。私はそれを他者の声、到来する他者の声と呼びたい。

テント芝居にまで話が及んで長くなってしまいました。私は単に朝鮮人だから朝鮮を表現しているのではなく、朝鮮人であると名乗りを変えた時に孕んだものがあり、それを表現したい欲求と意志があるから役者をやっている。このことから朝鮮と日本、朝鮮人と日本人という在り方について、さらには野戦之月海筆子のテント芝居の在り方について考えたいのです。

野戦之月海筆子のテント芝居および役者とは、この手と足で建てたテントで、地べたの土舞台で、そして生身の身体で、当事者性を媒体するものだと思っています。ここで言う当事者性は、朝鮮に限られません。同時に、芝居は生もので、観客に食べられて終わるものだと思います。公演が終わった後、芝居は解体されたテントとともに跡形もなく消えてしまう。

しかし、それは「消費」ではなく、「消化」されながら血肉と化するものです。小野さんがおっしゃるように、野戦之月海筆子のテント芝居は、「消費社会の真っ只中で、人間関係が徹底的に貨幣に媒介されてあるなかにも、やはり、殺し、食い、自分を再生する」、まさにそんな場なの

です。そこでは政治的正しさは通用しない。それはとても厳しい場なのですが、祝祭的な、豊かな場です。野戦之月海筆子は、資本主義社会の中にあつて、財政的には貧乏ですが、思想的にも精神的にもとても豊かです。

私は誰でも、朝鮮人当事者になることはできないけれども、芝居を通じて、朝鮮人としての当事者性を孕むことはできると信じています。日本人、朝鮮人を問わずです。例えば、関東大震災時に虐殺された朝鮮人当事者になることはできないけれども、芝居を通じて、その当事者性を孕むことはできると。欲求と意志があるかないか、結局のところ、違いはそれだけなのではないか。野戦之月海筆子の役者になって、そう確信しています。

『棄民サルプリ』を観劇されて、きつと小野さんにも、何かが媒体されたのではないのでしょうか？ それが小野さんの腹の中で蠢いている。小野さんの書簡を読んでそのような感想を抱きました。

二〇〇九年一月二日に開催された徹底討論「フリーターの敵はだれか フリーター運動におけるアジア的抗争の可能性」での、「みんなフリーターでしょ」という小野さんの言葉に触発されて、私は、「みんな役者でしょ」と言いました。私の言葉で言い換えれば、それは、誰でも芝居を通じて朝鮮人としての当事者性を孕むことができることと同義です。

「みんなフリーターでしょ」という小野さんの言葉にた
くさんの示唆を受けます。同時に、小野さんが言うフリー
ターと、私が言う役者には、何か通じるものがあるのでは
ないか、何か通じるものを媒体しているのではないかと
直感します。フリーターという名乗りも、役者という名乗
りも、一般的な意味ではまかり通っている言葉なのです
が、その名乗りを再発見することで、世界の見え方が変わ
るのではないかと。そんな期待を抱かせてくれます。

崔真碩様——二月一六日付小野俊彦 記号を「消化」する五臓六腑とは

僕は今まで、「フリーター」という言葉を、「われわれ」
の存在を表現する言葉として選ぶこと、行政や統治の用語
と化しつつあるレッテルを、「われわれ」の文化的集団的
アイデンティティとして断言し返すことによって、われわ
れと「かれら」との関係を変容させること、それだけが政
治であると信じて、社会運動と呼ばれる場に顔をつっこん
できました。たとえば適切かどうか分かりませんが、「フ
リーター」という言葉は、われわれと「かれら」のあいだ
で商品として流通するような何かです。だからこそ交渉を
引き起こすと思います。「フリーター」という商品に、そ
れぞれの集団がそれぞれ値段を、価値をつけあう交渉があ

小野さんのフリーターという名乗りには、政治的なもの
にとどまらない何かがあるように感じます。フリー
ターと名乗るなかで、小野さんは、どのようにして、自己
の解体と再生を経てこられたのでしょうか。そのことを想
像します。フリーター運動の現場で、フリーターという名
乗りに込められている思想や想いや感情をお話しくださ
いませぬか。よろしくお願ひします。

る……ぼくは「商議」という言葉を使いたいのですが、そ
こにこそ政治があると信じています。「フリーター」とい
う言葉は反発や同情など、さまざまな価値付けを引き起
す言葉として世の中に流通していました。だからこそ、そ
のレッテルとしても流通している言葉をわれわれの名乗り
に変えることが政治的な有効性を持つことを期待できるの
であり、それはたとえば「プレカリアート」などのような
新造語によっては得られないものです。

さて、前便でちえじんそくさんは僕に「フリーターと名
乗るなかで、小野さんは、どのようにして、自己の解体と

再生を経てこられたのでしょうか」と尋ねられました。ま
ず正直に言えば、僕は「自己の解体と再生」の物語のよう
なものを開示することには躊躇があります。躊躇がある
というよりも、関心がないと言ったほうがはつきりするかも
しれません。僕は政治的な名乗りの可能性について考えつ
づけてきましたし、これからもそのことだけを考え続けたい
と思っており、そのことと自分の物語を開示することが
決して直通はしないということからまずはお話ししたい。
仮に僕が最初の往信でちえじんそくさんに一種の自己開示
のようなものを求めたのだとしたら、それに僕が自己開示
で応じるのは当然求められるべきフェアな態度だと思うの
ですが、いまの僕の関心はややずれています。僕は、自
分自身にもこの社会で生きることのシンドさがあるからこ
そ、その抵抗を表現する場を求めて社会運動と呼ばれる営
みに顔をつ込んだわけですが、僕にとってそのような場
の魅力は、決して自分のシンドさがそのまま表現されるこ
とだとか、誰かにそのまま分かってもらえることなどでは
なくて、自分の抱えているシンドさが、たとえばある絶妙
な言葉によって「言い当てられる」と同時に「言い外され
る」こと、自分の腹の中の蠢きが外に向かって引き剥がさ
れて吹きさらされるときの、その爽快な情動が、僕と他
人を共に元気にしてしまう感じなのです。僕が「みんなフ
リーターでしょ」と他人に問いかけるときには、その言葉
がみんなの持っている不安や苛立ちやを「言い当てる」と

同時に「言い外す」ことが持つ可能性にかけています。そ
の言葉を聞いた人に「ああ、そういうことだったのか」と
いう爽快な気づきのような感じもたらされることを期
待するので。「言い当てる」と同時に「言い外す」とは、
いかにも曖昧な言い方になってしまっただけの申す訳
が、それは僕が最初の往信において、ちえじんそくさん
の表現行為が〈朝鮮〉という記号を通じて僕に「通じた」と
感じると同時に、なぜ日本人である僕にちえじんそくさん
の腹の中の蠢きとしての「朝鮮」の意味が通じるのかとい
う疑問が、矛盾しつつ同居する感じをお話ししたことにも
関わると思います。「朝鮮」がちえじんそくさんの腹の中
の蠢きの何を言い当てたのか、そしてそれが日本人である
僕に「通じる」とときには何が起きているのか。

ちえさんからいただいた前回の返信にはひとつの矛盾が
あります。少なくとも僕にはひとつの矛盾に見えるよう
な点があります。端的にお聞きしてみたい。ちえじんそく
さんは「ウシロカラササレル」という恐怖や身構えが、ま
ず腹の中に蠢いたから、それを表現するために、それを表
現するための適切な言葉として「朝鮮人」を名乗ったの
か。それとも、ちえさんが「私は単に朝鮮人だから朝鮮を
表現しているのではなく、朝鮮人であると名乗りを変えた
時に孕んだものがあり、それを表現したい欲求と意志があ
るから役者をやっている」と書かれているように、名乗り

を変えたときに孕んだものこそがより問題なのか。そこには微妙なズレがあります。多少乱暴かもしれませんが、まずはそのように二者択一的な問いを突きつけることをお許しください。これは僕がちえさんに問いかけたかったことの肝に関わるのですが、僕の関心は後者のほうの言い回しに集中します。自分がすでに孕んでいたもの（たとえばそれはその名乗り以前の身構えの感覚）を適切に表現するために朝鮮人であると名乗りを変えたのではなくて、逆に朝鮮人であると名乗りを変えた時に孕んだものがある、というその順番です。差別者と被差別者にとって全く別の内実を持ちうる「朝鮮」「朝鮮人」という言葉が、それでも同じように、平等に、記号として流通し、交換される、そういう空虚な言葉が出発点であるということ。僕はちえさんの意図がどうであれ、この順番にこだわりたい。ちよつと野暮な例かもしれませんが、確か有名な文化人類学者のレイ・ストロースの言葉に「痛いから「痛い」というのではなく、「痛い」というから痛いのだ」というのがあります。「痛み」のような感覚すら、もしそれを指す記号がなければ、僕たちはそれを少なくとも「痛み」としては感じない……。その意味では「朝鮮」という記号、あるいはちえさんが名乗りとして選び取った「朝鮮人」という言葉が、仮に僕らに、あの芝居の観劇者たちに何かをもたらしたのだとしても、ちえさんがこの日本社会で経験した「自己解体」や「身構え」のようなもの、すなわち「痛み」そ

のものが、そのまま僕に通じたただとか、理解できたなどとは言えない。そのような「分かったふり」をする日本人が、自分の立場を問わずに朝鮮人その他の被差別者に「同情を寄せる」などということはやはり偽善と言わなければなりません。同情ではない何かが必要です。また、しばしば「差別したものが差別されたものの気持ちに分かるわけがない」などと言われることもあります。そのような分断だけでも何か足りない……。

僕は個人の私有している経験や本質ではなく、むしろそのようなものを軽々しく否定したり極度に歪めたりしながら人に伝わり、交換されてしまう記号や貨幣、その真つ只中に自分が生きていることを自覚します。たとえば、そういう社会構造に関わる視点から差別を考えたように思える津村喬の議論を僕はおもしろいと思います。津村が一九七〇年前後の日本社会の差別性を見るのは第一に入管政策であり、また当時の都市計画思想などでした（『われらの内なる差別』。彼は新宿の西口が「広場」から「通路」へと名称を変えられ、広場に集う有象無象の表現や身体行為が道交法による取り締まりの対象となったことに「差別」を見えています。また、朝鮮出身の日本人女性である森崎和江は「官制差別」と「民制差別」との対峙という興味深い見方を教えてくれます。森崎にとって民衆の生の中にある差別と被差別とのからみあいこそが、国家暴力に直結する最悪の「官制差別」に対する抵抗なのです。津村がこ

だわった「広場」に対する差別こそ、森崎のいう「官制差別」そのものだと思います。おそらく広場の中には差別も被差別もある。ただ通路を歩かされているだけの僕たちには、民衆としての差別感覚すら奪われているのかもしれない。それこそ、ちえさんが『悍』第三号で書いていた、在特会のような連中が「腑抜け」である理由だと思っております。では、僕らの「腑」は何か。ちえさんの中にもまた「朝鮮」を差別する「韓国」があつたとしたら、「朝鮮」を名乗る前のちえさんにとっては「韓国」もまた「腑抜け」だったのでしようか。腑抜けが五臓六腑を手に入れるにはどうしたらいいのでしょうか。

さて、発明される腑もあれば、思い出す腑もあるかもしれません。僕もやはり少しだけ自分の物語を語らせてください……。僕は「フリーター」という名乗りに賭けて社会運動の場で何かをはじめようとする前、最初の往信で触れたように、大学院生として朝鮮戦争当時の北九州の「朝鮮人港湾労働者」たちの足跡をたどろうとしていました。その極めて拙い研究の中から見えてきた「朝鮮」とは、僕にとつては次のようなものでした。まず、僕自身が生まれ育った「都市」である北九州には一九世紀後半以来、南九州や中国地方の農村から切り離された人々が就労機会を求めて流れ着いてくるわけですが、やがて新たに勃興する石炭産業や製鉄産業に吸収されてゆくそれらの労働力には、

すでに「労働者」と「労務者」との分断が生じてゆきます。たとえば底辺の労働社会をうごめく港湾労働者には「ごんぞう」という独特のあだ名が付けられ、そこには差別と畏怖とが入り交じった感情が込められていたことが当時の資料から伝わってきます。後に日本の朝鮮植民地支配を背景として数多くの朝鮮人が都市であつた北九州に流入し、「朝鮮人労働者」として一種のステイグマを帯びて社会集団化される以前にも、すでに底辺労働力は「エスニック化」されていた、一種の民族集団ですらあつたように僕は思います。僕はやがてアカデミックな研究自体は諸事情により中断しますが、「フリーター」のエスニック化とでもいべき状況に、その状況の中にある政治に注目して、レッテルとしてのフリーターを名乗りへと変える政治を担おうとした問題意識は、「ごんぞう」とレッテルを貼られた人々の存在を見ていたときと変わっていません。そして僕が、ひとつの「民族」としての港湾労働者の存在に惹かれ、後に「フリーター」というものを一種の民族性として担おうとしたそもそもの理由を探るならば、僕はちえさんの求めに対して自分の物語を語ることを拒否してしまつたわけですが、やはりどうしても自分が生まれ育つた町のこと、底辺労働者とアル中と犬が跋扈するあの街のことが思い出され、そして、あの小汚い世界を徹底的に差別しながら、そんな街からの脱却を夢見てわずかな学歴を溜め込もうとしていた自分を思い出したりもします……。しかしあくまで

もいまの僕には、あの小汚い街を、かつて谷川雁や森崎和江が九州の炭鉱労働者の文化に一種の原共同体的な磁場を見出そうとしたように、少しでも理想化するとは困難であるという実感も付け加えねばなりません。

ちえさんは「消費」を「消化」と言い換えました。しかしちえさん、僕は「消費」は「消費」だと思ふ。僕は確かに「消費社会」や「消費者」というときの「消費」に対しては批判的な含意をもって「本当に消費することが必要なのではないか」という言い方をしましたが、正直に言えば、どうしたらそんな「本当の消費」なんてことに到達できるのか、その道筋が分からないのです。だからこそ差別と被差別、善と悪とが相互に没入しあう……というようななんだか曖昧なことしか言えないでいる。ちえさんが「消費」を「消化」だと言い換え、僕の腹にも何かの蠢きが伝わったと信じようとするとき、ちえさんは、僕たちの「消費」行為が、そのままいかに「消化」でもありうるのか、その道筋を探ることの困難を回避していないでしょうか。僕たちはもともと、貨幣に媒介された消費そのものの諸相をえぐるように見る必要があるのではないのでしょうか。「消費」を「消化」と言い換えるだけでは、貨幣を、空虚な記号を媒介してはじめて可能になる交換というものが僕たちの生を支配しきつていくこと、それでもそこから危うい可能性を拾い上げようとする作業にはつながらないと思いま

す。「消化」するということからは僕らは立派な五臓六腑をもつて、食物を噛み、飲み込んで元氣よくウンコを出さなければならぬ。しかし人に恋をして腹がうごめく程度の腹では、おにぎりひとつも消化できずにユルユルのウンチが出そうです。僕は最近下痢気味です。食い、消化し、ウンコをすること、それから性、死、すべてが「通路」に流し込まれ、消費されているときに、僕らはどこから本当の胃袋を、抜けた腑を取ってくるのでしょうか。そのような生と死、食と性の営みがひとつの広場の中でからみあうような場合は、やはり「ふるさと」としか言いようのないものなんでしょうか。それは「民族」の問題だと言ってもいいかもしれない。そして僕は、ちえさんは、どこまでそんな「ふるさと」や「民族」を失っているのかいなのか。かつて谷川雁は「ふるさとを創れ」と言いました。ちえさんが書いていた「関東大震災を再発明する」という桜井大造さんの言葉を思い出します。「朝鮮（人）」という言葉、記号を名乗ることから始まる時間を生きている人にとって、「ふるさと」とはどういう風に発明されるものなのでしょうか。そして僕たちにとっての「ふるさと」が創造や発明の行為の果てにしかないものだとして、僕とちえさんの「ふるさと」は出会いの広場となりうるのでしょうか。そしてその「ふるさと」の肥溜めには、僕たちの臓腑から出たどのような色のウンコが満ちるのでしょうか。

小野俊彦様——三月三日付崔真碩 関東大震災時の朝鮮人虐殺を再発明する

ようやく小野さんの「フリーター」という名乗りに込め

たことが腑に落ちた、わかりかけたような気がします。私が「朝鮮人」と名乗りを変えたこと、「韓国人」でもない、「在日」でもない、「在日コリアン」でもない、「朝鮮人」と名乗ることに通じる政治を感じます。小野さんの言葉を援用しつつ言えば、人間としての尊厳が損なわれてきたこの「われわれ」の文化的集団的アイデンティティとして断言し返すことによって、われわれと「かれら」との関係を変容させること、それだけが政治であると信じて、表現活動をしています。

朝鮮人というこの負の響きは、時代の移り変わりとともにさまざまな響きを帯びながら、複雑化してきた／いるように思います。戦前からの差別語としての負の響きに加え、現在の日本社会では、朝鮮≡北朝鮮、朝鮮籍≡北朝鮮人（北朝鮮国民・公民）というようにして、在日朝鮮人の歴史に対する知が無い状況下で、その意味が現実政治によって振り回されています。朝鮮人は絶えず朝鮮を奪われ続けてきた／いるのです。朝鮮人と名乗り、この負の響きを断言し返すことで、私は「かれら」から朝鮮を取り戻し

たい。

その名乗りは、かつては負の響きとともに歴史性や政治性を帯びていたはずなのに、すでに消費され尽くされ当たり障りのない言葉になってしまった「在日」「韓国人」ではダメで、ましてや、いま流行りの「在日コリアン」などという言葉は、依然としてあるはずの差別感覚を（日本語の魔力を借りて）隠すための誤魔化しではない。名乗りを通じて関係の在り方を変容させること、そこに在る政治に、「フリーター」と「朝鮮人」という名乗りが目指すことの近さを感じますし、触発されるものがあります。「フリーター」を一種の民族性として担おうとする小野さんの態度には、目から鱗が落ちました。

前便での朝鮮人という名乗りに関する小野さんの質問にお答えします。「ウシロカラササレル」という恐怖や身構えが、まず腹の中に蠢いたから、それを表現するために、それを表現するための適切な言葉として朝鮮人を名乗ったのか、あるいは、朝鮮人と名乗りを変えた時に孕んだものこそがより問題なのか。小野さんと同様に、私の関心もまた後者の方の言い回しに集中します。小野さんが言うよう

に、自分がすでに孕んでいたものを適切に表現するために朝鮮人であると名乗りを変えたのではなく、逆に朝鮮人であると名乗りを変えた時に孕んだものがある、というその順番です。ただし、たしかに順番的に考えればそのように言えるのですが、そうきれいに順序立てられない側面もあります。実際はもつと混沌としている。

私は朝鮮人と名乗りを変える前から、朝鮮人という名乗りが在ること、朝鮮人という名乗りに込められた負の響き、そして自分が朝鮮人と名付けられる人間であることをおそらく知っていた、それゆえに、避け続けていたのだと思います。それは朝鮮人という負の響き、朝鮮人という存在に対する怯えです。私にとって、朝鮮人とは、そうであってはならないような存在として在ったと思いますし、知らず知らずのうちに、朝鮮人という名乗りだけは意識の外へ外へと追いやるように働きかけていたと思います。曖昧な言い方で申し訳ないのですが、それはけっして幼少の頃の話ではなく、私が二十代後半に朝鮮人と名乗りを変える前までの話なのにもかかわらず、その記憶が曖昧なのです。言うなれば、記憶に霧がかかっている感じです。ただはつきりと言えるのは、朝鮮人という名乗り、その負の響きを避け続けてきたことです。この避け続けは、逆に言えば、そのように言葉化しなかつたけれども、私は日本社会で、朝鮮人と名乗り続けてきた、朝鮮人と名付けられ続けてきたのではないか、そう思います。

ですから、「朝鮮人であると名乗りを変えた時に孕んだものがある」とは、朝鮮人と名乗りを変えることで私がそれまでに避け続けてきたものを受け容れはじめた、ということかもしれません。私が避け続けてきたものは、歴史です。死者です。朝鮮人であるゆえに虐殺された、朝鮮の歴史的な死者です。

繰り返しになりますが、名乗りを変える転機が、二〇〇二年九月一七日の日朝首脳会談以降、日本社会が狂乱して拉致一色に染まった時であったこと、その時に関東大震災時の朝鮮人虐殺を想像したことは、私にとって青天の霹靂のような出来事でした。その時の日本社会の空気を「ウシロカラササレル」と読んだこと、その空気が関東大震災の時から依然として変わらずにこの社会には在ると直感したことが、私の朝鮮との出遭い直しでした。

関東大震災の時、朝鮮人が虐殺されたのは、虐殺された彼／彼女が朝鮮人だからです。日本人が朝鮮人を虐殺することができたのは、虐殺した彼／彼女が日本人だからです。朝鮮人は朝鮮人であるゆえに日本人によって虐殺され、日本人は日本人であるゆえに朝鮮人を虐殺しえたのです。戦前、日本人が朝鮮人を虐殺することは犯罪ではありませんでした。今日においても朝鮮人虐殺の問題は清算されないまま、日本社会は依然として虐殺の責任の取り方を知らないままです。この不条理を前にして、私は、朝鮮人と日本人との関係を変容させる政治の原点は、日本人が朝

鮮人を虐殺する現場に在るし、ここからやり直さないといけないのだと思います。関係を変容させる政治の原点は、日本人が朝鮮人を虐殺する現場に在るし、ここからやり直さないとけない。

朝鮮人という名乗りが孕むことになる緊張を極限化して言えば、日本社会で朝鮮人と名乗るということは、朝鮮人であるゆえに虐殺されるということを受け容れることと同じなのではないか。朝鮮人という負の響きに響くものはこれなのではないか。朝鮮人と名乗ることはすなわち、虐殺された死者と連累することなのではないか。

「朝鮮人であると名乗りを変えた時に孕んだもの」をお話するために、私はまたしても、小野さんの言う「自己開示」をしてしまっているのかもしれませんが。私も、日本の私小説的な甘ったれの「自己開示」など好きではないのですが、今まで長々と書き連ねたような伝え方しかできない、ほかに伝えるための言葉がないのです。へたな言葉、へたな書き方だとは思いますが、私にとつて、「ウシロカラササレル」は、朝鮮人と日本人との間に在る歴史と政治をひとつの言葉に凝縮した詩です。それは同時に、私が役者をやっている欲求と意志を表すものです。

私は、桜井大造さんの言葉を借りて、昨年の野戦之月海筆子の秋公演『棄民サルプリ』で、「関東大震災（時の朝鮮人虐殺）を再発明する」ことを表現したと言いました。

より具体的に言えば、「関東大震災を再発明する」とは、この身体で、朝鮮人と日本人との関係を変容させる政治の原点としての、日本人が朝鮮人を虐殺する現場をテントの中の土舞台で表現することです。

竹やりを持った日本人が朝鮮人を虐殺することの隠喩として、デンパチ、デンパチしようと近づいてくる二本の電信柱がありました。朝鮮人の日雇い労働者である残恨は幻覚の中で、デンパチしようと近づいてくる二本の電信柱に向かつて、「な、何だお前ら。ああ、俺にデンパチする気だな。やめとけ。俺はデンパチには強いんだ。デンパチなんて屁のカツパだぞ」と強がりながら股を開いて腰を落とし、落とした腰を逆転させて、股を開いたままに跳びました。跳んでは股を開いたまま着地し、そのまま腰を落としながら地をドンドンドンと両足で踏み、再び、落とした腰を逆転して、股を開いたまま跳びます。そして、跳んでは股を開いたまま着地し、腰を落しながら地をドンドンドンと両足で踏む。残恨はこの動作を繰り返しながら、デンパチから逃げまどうのですが、残恨は腰を落としては跳んで、地をドンドンドンと両足で踏みながら、地中に眠る死者の骨を呼び起こす——。これは、朝鮮人の日雇い労働者である残恨の幻覚であり、残恨の罅型です。

解説じみた話はずまらないのでこれ以上はやめます。一人の役者としての力量不足、野戦之月海筆子の集団としての力量不足を承知の上なのですが、これが『棄民サルプリ』

において残恨がテントの中の土舞台で「関東大震災を再発明する」ことの表現でした。あくまでもこれはあと付けですし、身体表現を無理やりに言葉化しても仕方ない、なんとも味気ないのですが、小野さんと腹の中の蠢きとしての朝鮮について話を続けたくってお話ししました。これまた、私にはほかに伝えるための言葉がない……。

観に来てくれたお客さんのお腹にも何かの蠢きが伝わりと信じて、私は芝居やっています。当然、小野さんのお腹にだって、そうです。ただし、伝わったと信じるそれが何かはわからないし、私と同じ蠢きが起ころうとはもちろん思っていません。そこには当然、「言い当てられる」と同時に「言い外される」ことがある。しかし、テントの土舞台で、この身体を通して、朝鮮人と日本人との関係を変容させる政治の原点としての、日本人が朝鮮人を虐殺する現場に観る者を引きずり込むことはできないのではないか。朝鮮人と日本人との関係を変容させる政治に参加させることができるのではないか。「関東大震災を再発明する」とは、虐殺される朝鮮人をメロドラマ化して演じて日本人から朝鮮人への同情・憐れみを頂戴しようというのではけつしてなく、竹やりを握るその手と竹やりが突き刺さった背中が繋がる、虐殺の現場のリアリズムを取り戻すこと、そして逆転することであり、そのことを信じて役者をやっているわけです。

むろん、『棄民サルプリ』は「関東大震災を再発明する」

だけの芝居ではありませんでした。過去と現在における棄民を主題にした芝居ですし、また、パートタイマーの刑天が、

パートというのはパーマネントトライアルのことよ。永遠の試み。トライし続けるのよ。たとえ首が飛んでも、動いてみせるわ。

と、パートタイマーという名乗りをユーモアをもって断言し返す芝居でした。様々な主題が織り込まれながらも一貫しているのは、虐げられている棄民の悲惨な現実を再発明することでした。

小野さんが求めている、「差別と被差別、善と悪とが相互に没入しあう」ような広場が何なのか、また、生と死、食と性の営みがひとつの広場の中で絡み合うような「ふるさと」が何なのかは私自身もよくわかりませんが、しかし、野戦之月海筆子のテントとはそれなのではないか、あるいは、野戦之月海筆子のテント芝居が志向していることはまさにそれなのではないかと直感します。今の私に言えるのは、野戦之月海筆子のテントとテントの中の土舞台は、祝祭性を持つ広場であり、虐げられた者たちの避難所であるということだと思います。話のついでに、私が「ふるさと」や「民族」を失っているのかいないのかという小野さんの質問にお答えすれば、小野さんが言うように、生と死、食と性の

営みがひとつの広場の中で絡み合うような場として「ふるさと」や「民族」が在るのだとすれば、ひよつとしたら、今の私にとつては、野戦之月海筆子のテント芝居、あるいは、テントで役者やっているこの身体が、「ふるさと」であり、「民族」なのかもしれません。私は、ひとりで多数、密度がとつても濃いのです。

最後に、「消費」と「消化」をめぐるのですが、私が「消費」を「消化」と言い換えたのは、テントは生きているという感覚に基づいています。これもまた、一人の役者としての力量不足、野戦之月海筆子の集団としての力量不足を承知の上で、それでも信じて芝居やっているとこのことなのですが、テントは生き物です。野戦之月海筆子の芝居自体は三時間弱で終わります。もちろん、観客にとつて芝居は観終わってしまったえばそれで終わりですし、役者にとつても公演が終われば、舞台上に立つて観客にさらされ芝居していた時の感覚は、ちょうど解体され跡形もなく消えるテントと同じように、きれいに消えてなくなります。私自身、正直に言えば、今は役者であることを忘れていませんし、舞台の立ち方、芝居のやり方がわからない（じつは『棄民サルプリ』のこともよく覚えていない、ですから、この書簡は振り絞るように思い出しながら書いています）。

しかし、本当に不思議なもので、今年の秋に野戦之月海筆子の公演がありますが、その時にはきつと、また身体が

芝居を思い出し、テントの中で『棄民サルプリ』の批評が始まる。それは次の公演に向けた稽古の段階から始まることなのかもしませんが、公演本番の時にもつとはつきりと、新作との間で、『棄民サルプリ』を批評する眼が生まれてゆく。そうして身体は前作を離れてゆくのですが、この過程で感じることは、テントは生きているということ。これは役者にとつての感覚なのかもしれませんし、あくまでも私は野戦之月海筆子のテント芝居を観ることはできないのですから、そう言い切つていいかわからないのですが、役者と同じように観客も、テントは生きている、テントは生き物という感覚を覚えるのではないでしょうか。

役者としての勝手なわがままではありますが、お客さんには毎年足を運んでほしいという願望をもつて芝居しています。なぜならば、野戦之月海筆子のテント芝居もまた、テントと共に生きているからです。その生きてきた／＼の過程に立つて野戦之月海筆子のテント芝居を観る時、三〇〇〇円の入場料を支払つて観劇する行為は、貨幣に媒介された単なる消費でない、小野さんの言う「本当の消費」になりうるのではないか、そう夢想します。私が「消費」を「消化」と言い換えたのは、観客である小野さんに向かって、テントは生きているという感覚に基づいて、小野さんもすでに、祝祭性を持つ広場であり、虐げられた者たちの避難所であるテントを身体化しているのではないか、

テントを生きているのではないか、そう問いかけてみたいからです。残念ではありますが、小野さんの言う「本当の消費」について、私にはこれ以上考えられませんし、あとは只管、この手と足でテントを建てて、次の芝居に向けた準備と稽古を精一杯やるだけです。ずるい言い様ではありませんが、「消費」と「消化」、そして「本当の消費」をめぐっては、後日、今年の野戦之月海筆子の秋公演が終わった後のテントで、小野さんとゆつくりと談話したいです。「ふるさと」をめぐってもぜひ。ぜひまた、野戦之月海筆子の秋公演を観にいらしてください。

どうやら、テント芝居の話だけでこの往復書簡を締め括らなければなりません。私は小野さんに聞きたい。「フリーター」という名乗りを「われわれ」の文化的集団的アイデンティティとして断言し返すことによつて、われわれと「かれら」との関係を変容させること、それだけが政治であると信じて社会運動する時、その交渉する（商議する）身体は、テント芝居の役者の身体性に近いものがあるのではないでしょうか。と。「フリーター」を名乗る政治の現場で、小野さんは「フリーター」を再発明する役者なのだと言いたい。「みんなフリーターでしょ」という小野さんの言葉にかけて、「みんな役者でしょ」と言つてしまえば、その意味合いがずれてしまうかもしれません。一方で、役者とは誰か、芝居とは何かを再吟味し、広場を再発明する契機になりうるのだとしたら、広場が徹底

的に奪われ続けている今日の日本社会において、「みんな役者でしょ」という問いかけは、官制差別に対峙する政治を生み出しうるかもしれない。内なる民制差別をも笑い飛ばし、私たちを取り囲む窮屈な通路に風穴を開けるかもしれない。フリーターを名乗る役者と朝鮮人を名乗る役者が出遭う広場、そこで何が起こりうるのか――。

小野さん、ありがとうございます。アンニョンヒゲセヨ、安寧でいらしてください。

田